

未上演作

「たつた1人の。」

作・水上宏樹

登場人物

男1 先輩

男2 警備会社の司令補

男3 劇団の演出家

男4 隣の部屋の男

女1 自称制作の女

女2 ハーフの女

女1 俯く。

男1 ここらへんの作家はおさえといて。
高校演劇なめたらダメよ。ねえ、君さ、
もぐりでしょ、もぐりならもぐりらしく、
必死に勉強するの。

女1 すみません。先輩。

男1 高校演劇部のもぐりなんて聞いた
ことないよ。

女1 私の高校、演劇部ないんです。
男1 北高でしょ？ 不登校なんだよね、君。
夏。

女1 はポテト食べながら。

男1 アチヨー。（女1に当たるか当たら
ないか寸止めで）

女1 ぐへ。（女1はくらつたふり）
男1 モリエール。

女1 サリエール？
男1 アチヨー。

女1 ぐへ。

男1 え、ベケットは？

女1 バケット？ バケットはパンです。パ
ン。これはポテトです。ポテトのMです。

男1 アチヨー アチヨー アチヨー
女1 ぐへぐへぐへ。

で演劇部の立て看板が目に入つた。
女1 演劇なんて見たことなかつたから、
死ぬ前に一度くらい。

男1 重いよ、重たすぎるよ。ポテト片手
にする話じやないよ。朝からマクドナル
ドで聞く話じやないよ。

女1 そしたら先輩が、舞台で何かやつて
て。
男1 何かつて何だよ。ああいうの一人芝
居つていうんだよ。大変なんだよ、ああ
いうの。

女1 私感動したんです。

男1 あ、うん。

女1 もう少し生きてみようつて思えた
んです。
男1 あ、うん。それで、わざわざ部員俺
しかいない演劇部のもぐりになろうつ
て思つてくれた訳ね。

女1 先輩絶対一番有名な役者さんにな
れます。

男1 いや、俺だつてそのつもりよ。10
年後20年後のために、この3年間で大
抵の有名な役の台詞は頭入れちゃつ
るのよ。君もさ、もぐつてまで来てくれ
るならさ、もうちょっと勉強しようよ。

南高の演劇部の門たたいて3ヶ月は経
つたでしょ。
女1 学校サボつてただただ道歩いてた
ら、この南高校まで辿り着いてたんですね。
男1 北から南まで歩いて来た訳ね。それ

男1、テーブルに置かれたポテトを食べる。

女1 先輩私。
男1 熱つ！言えよ。

女1 こんな熱いなら、さつき食べた時に
火傷したらさ、役者はダメな訳。わから
うえお。はきはき言えないとき、ダメだ
ろ。

女1 先輩猫舌だから。
男1 猫舌？なんだそれ。
女1 もういいです。はい。アンケート。

A 4サイズの封筒を手渡す。

男1 アンケート？なんだこれ。
女1 先週の夏定期公演「現代版 八百屋
お七」のアンケート、今日持つてこいつ
て言つたから持つてきたんじやないで
すか。

男1 そうだつけ。

女1 ほんと先輩は、台詞覚えはいいけど、
他のことは何だつてすぐ忘れるんだか

男1 「野暮を承知で言えば、そもそも八

ら。

男1 そうか、そうだ沢村先生に見せない
といけないんだった。

男1 演劇部の顧問だよ。
女1 部員一人でも顧問つているんです
ね。

男1 いるよ、バカ。部外者の君の出演だ
って、どうせ誰も見に来ないからって許
してくれてる観音菩薩みたいなおじい
ちゃんだよ。

封筒から1枚のアンケートを取り出す。

男1 1枚！
女1 贅沢言わない。
男1 世知辛いな。

男1 は封筒からアンケートを取り出し、
読み始める。女1うつむき。

男1 アンケート？なんだこれ。
女1 先週の夏定期公演「現代版 八百屋
お七」のアンケート、今日持つてこいつ
て言つたから持つてきたんじやないで
すか。

男1 アンケートを読む。

百屋お七を二人だけでやる必然がない。
部員が二人だから二人芝居つていう発
想が安直。主役の彼、一人力んで、大劇
場のミュージカルとでも勘違いしてい
るかのような声量。語尾の発音に難があ
り気持ち悪かった……これ誰のこと？
女1 主役だから、先輩のことです。
男1 クソつ。おらはもうダメだ。

そのアンケート用紙をくしやくしやに
丸めてしまう。

女1 いや、私好きですよ。生きテエとか
消えテエ、みたいに。子音を強調するよ
うな言い方。舞台の時だけ。あれ好きな
んです。「テ」が「テエ」、「デ」が「デ
エ」。つて。
男1 おらは笑われてるべ。
女1 ねえ、先輩、先輩、また。自分のこ
と、おらつて。
男1 そうか、また出ちやつたか。ちよつ
と高ぶるとね、つい津軽弁がね。標準語
ペラペラになつてクラスのみんなと馴
染もうとしてるんだけどね。なかなかね。

きを読む。

女1 「が、しかし、二人の熱演に感激した。彼には、お七が火をつけてまでして会いたくなる色気がありました。」

男1 え。

男1、アンケートを奪い。

男1 そうなのよ、色気が大事なのよ。

女1 すぐ機嫌直して、先輩赤ちゃんとみたい。

男1 わかつてゐるね、この人。「どうもねぎとかにんにくを食つたみたいで、これは臭そうで」こうコミカルにやると色気も出るのね。

女1 先輩姿勢。背中。ピシっと。

男1 おつと、そうだそうだ。何何。

男1 アンケートの続きを読む。

男1 「あなたがたの演劇の夢を応援します。この先10年、20年、長い人生で、夢はいくつもの壁にぶち当たることでしよう。その壁を乗り越えられるかどうか。」

男1、またアンケートをぐちやぐちやにして投げ捨ててしまう。

しばらく炎を見つめている。

女1 先輩私。

男1 僕はこういう、夢に現実を突きつけて、青春を馬鹿にするような書き方が一番嫌いなんだ。

と…そこに大きな声で。

女1は男1を見つめている。

男1 なんだ。

女1はポケットからライターを出す。

男1 夢がぶち当たるいくつもの壁…：

女1 夢がぶち当たるいくつもの壁…：君まさか、たばこを、高校一年生が。君は一体何者なんだ。どこから来て、何がしたくて、こんな演劇部に。

女1 八百屋お七で使つた小道具です。男1 小道具。

男1すぐにライターを消し。二人姿勢を正し。

男1／女1 はい。

男1 ブレヒト。

女1 へ。

男1 ブレヒトは？

女1 誰？

男1 アチヨー。

女1 ぐへ。

男1 そんなんで女優がつとまるか。出直して来い。

女1 先輩私…制作がやりたいんです。

男1 え。先輩私…制作がやりたいんです。

女1 私、先輩を立派な役者にしてみせる。先輩のこと芸能事務所とかにたくさん売り込んで、有名にしてみせる。それが私の恩返しだと思ってるんです。

男1 おつと、吉三郎に会うために、お七が投げ入れた恋の火。

男1 え。炎が二人を繋いでる。

男1 女優志望じゃないの。

女1 制作です。

男1 制作？

暗くなる。

ここは20年後の男1の部屋。ボロアパートの一室。6畳一間の雰囲気。テーブルはちやぶ台に、椅子は座布団に変わっている。男1と男2。お茶をすする男2。ちやぶ台の上には、カットされたりんごが皿に並べられている。

男2 いい加減にしてよ。

男1 あ、はい。

男2 あんた今何歳だっけ。

男1 38です。

言いたかない訳よ。

男1 申し訳ない。

男2、お茶飲む。

男1 いい味でしょ。

男2 わからんよ。お茶の味なんて。

男1 青森の黒石にね、黒石茶つてあつてね、あ、私ね、青森の出なんですよ。須見司令補はどこの生まれですか。

男2 そのビルの？

男2 新潟の村上だ

男1 新潟の村上。偶然だな、ちょうど村上の話をしようと思ってたんですよ。とい

うのも司令補のお生まれになつた村上が茶畑の北限なんですね。でもその北限は、経済的な意味での北限らしいですね。実は本質的な北限はこの青森の黒石なんですよ。貴重なお茶なんですよ。青森物産展でたまたま手に入つたんです。貧乏でね、近所のスーパー閉店前の半額シールが貼られるタイミングを待ち構えるような情けない買い物しかできませんけど、お茶だけはね、なんだか、贅沢しちゃうんですよ、お茶だけは。

男1 りんごでもどうですか。
男2 ちやぶ台に置かれたりんごを勧める。
男1 そんな気分じゃないよ。
男2 これはうまいですよ。

男1 陆奥つていいましてね。青森の高級

りんごでしてね、貧乏ですから、毎朝朝刊に挟まってるスーパーのチラシ全部目を通して。こういうあるじやないですか、分厚いチラシの束が。

男1 は新聞のチラシの束を見せる。

男1 キヤベツはスーパーまるやすが安

い、きゅうりはスーパーやすひこ、鶏肉はスーパーひこまる。

男2 同じような名前のスーパーばっか

りだな。

男1 そんなスーパーを転々と回るよう

な情けない買い物しかできませんけど、りんごだけはね、りんごだけは贅沢しちゃうんですよ、やっぱり青森だからかな、りんごだけはね。

男2 だからいいって、そんな話は。
男1 いや、このね、陸奥はね。

男1りんご食べる。

男1甘味が上品なんですよ。酸味も多少感じ取つた口の中に、この苦くて甘くて深みのある黒石茶を流し込むとですね。

男1の言葉を遮り。

男2おい、貧乏だつたら、贅沢はお茶かりんごかどつちかにしろよ。当然だろ。高級りんご買うなら、お茶はおーいお茶でいいんだよ、おーいお茶で。正面入り口。あんたの持ち場はアトランティック商事ビルの正面入り口の外ね、外です、

男2、男1の髪の毛に触れる。
男1え。
男2ついてたから、ゴミ。で、今回はなんで持ち場離れちゃつたの。
男1よんどころない事情が。
男2何。
男1子どもの悲鳴がね。聞こえたもんですかから。
男2どこから。
男1向かいの公園から。

男2それで。

男1公園に駆け込んで、トイレの壁の後ろで、黒ずくめのチンピラ風の男が、そ

うですね幼稚園年長程度の女の子の腕を引っ張つて連れ去ろうとしていた、ピンときたんですよ、あ、これは誘拐だ。

男2待つた。

男1え。

男2そのまま、口開けたまま、いーして。

男1いー？

男2そう、いーして。

男1言われるがまま、前歯をさらけ出す。
男2はりんごに刺さった爪楊枝で、男1の前歯の汚れを取り始める。

男2それで助けたのね。

男1はい。一応、訓練は受けていますので、一通りの身のこなしは心得ています。

男2でもお父さんだつたんだよね。

男1はい、女の子は最初私の登場に驚いて声も出なかつたようですが、終盤はパパ、パパと叫んでおりました。

男2何してんの。

男1父親を誘拐犯だと思い込むなど、とんだ見当違いでした、大変申し訳なく思つています。

男2そうじやないのよ、俺が言いたいのはそこじゃないの、あんたこの仕事始めてどれくらいだつけ？

男1ようやく1年というところです。

男2じやあまさ、最初の研修で聞いた話覚えてるよね。

男2は鞄から研修資料を取り出す。

男2りんごの皮、気になつたから。で、

男2それで。

男1あ、はあ。これは誘拐だ、父親じや

ない、絶対に誘拐だと思つた。全身黒づくめの男はどこにだつている。でもその男は肌は色白だから、その黒がひときわ際立つて見えて、なんか第六感つて奴が働いたんですね。ピンときたんですよ。

男1新入社員、警備の心得。
男2そんなとこ読んでどうすんだよ、6

ページだよ、6ページ。

男1 (資料をめくり) 犯人に近付きすぎるのは危険。必ず犯人を追い詰め、自分で捕まえようとする者がいる。そして。

怪我をする。殺される。我々に武器はない。

男2 そう、基本でしょ、あなたの役割は公園から悲鳴が聞こえたら、警察に通報すれば良かったの。

男1 はい、でもそんな悠長なことを言っていられる

男1の言葉を遮り。

男2 確か半年前にもあったよね、駅の改札前の警備中に、ホームで様子のおかしい男見つけて改札飛び越えて、アクションスター気取って、それで女性助けて、でもそれは駅員の仕事でしょ、って。

男1 その時は痴漢から見事、女性を救い出せたと自負しております。

男2 でも、どんだけ正しいことしてもさ、持ち場離れちゃダメ。あなたが玄関立てなかつたせいで、アトランティック商業のビルに、不審者侵入してるので。今回一件の肝心要是ここね。

男1 はあ。

男2 相当怒ってるよ、先方さん。
男1 食べませんか。(りんご)

男2 食べる訳ないでしょ。呑気なもんだよ。上司は明日、年上の部下の不祥事の責任取つて、先方様に詫びに行くつていのに。

男1 恐縮です。

男2 あのね、あんたの持ち場での一挙手一投足は監視カメラで全部見られてんの。

男1 の携帯が鳴る。

男1 すみません、ちょっと。

男1 電話に出る。

男1 もしもし、もしもし、もしもし、もしもし、もしもし・・・もしもし。

電話切れる。

男2 何の電話だ。

男1 いえ、別に。すみません。とにかく、今回の件はお詫び致します。

男2 あのね、今日こうして家までお邪魔したのはね。言い辛いんだけどね。こう

男2 明かりを灯しておく、ということが

いうのは、言いたかないんだけどね。

男2 タイマーの音が鳴る。

男1 すみません。

男2 うるさい家だな。

男1 風呂湧きました。汚い風呂ですけど入つて帰られますか?

男2 入る訳ないでしょ、風呂なんて。あのさ、俺はさ、帰つたら綺麗な奥さんとかわいい子どもが二人待ってるの。あんたと違うの。あのね、警備員つて仕事は命令による統制が取れないと成り立たない仕事なんです。私司令補ですよね。

私の指示は守つて下さい。
男1 ごもつとも。

男2 警備は何より予防です。犯人を逮捕することが仕事じゃない。犯罪が起ころ前に食い止める。例えば。

男2 明かりを消し。

男2 こんな風に部屋が暗ければ。

男2 明かりを灯し。

我々の仕事な訳です。

男1 首ですか。
男2 でも君は。

また男2明かりを消し。

男2 部屋を暗いままにし、自分の力を過信している。警備員の仕事の大抵は単調で地味で忍耐がいるんです。痴漢だ誘拐だ、そんなことは素人が見たって、痴漢なんだよ、誘拐なんですよ。仰々しい芝居してる訳じゃないんですよ。あんた舞台俳優か、違うでしょ。我々警備員には君の髪の毛に付着した小さな埃、君の前歯と前歯の狭い狭い隙間に挟まつたらんごの皮のカスこそを、見つけ出せる、集中力、洞察力が必要なんです。逆に言え、そういうことに気付けないような観察眼と意識力しか持ち合わせていなければ、あんたは警備員失格だ。覚悟しといて下さい。一週間自宅謹慎だ、わかつたね。

男2 は出て行く。暗い部屋に男1一人に。俯き。

男2 はあ。一文無しじや、夢もへつたく

れもねえや。

ポケットから、たばことライターを出す。やり切れない感じでたばこをくわえ、ライターの火を灯す。と、部屋に女1がいる。

女1 先輩、大丈夫?
男1 君か。
女1 どうしたの?
男1 うん。
女1 元気ないじゃない。

男1 君はいつも僕がしんどくなつた時に限つて、顔を出す奴だ。不思議な女だよ。

女1 先輩ずっとこの、フリントホイールのライター。

男1 ああ、なんだか、その方が好きでね。

女1 今どき珍しい。

男1 警備員の仕事、一週間自宅謹慎になつた、きつと首だ。

女1 良かつたわ。いいチャンスだわ。いつも先輩の方から、辞めてやんなさいよ。

男2 はりんごを食べて。

女1 うん、これ、おいしい。

男1 こんなボロアパートでさ。

女1 いいじやない、私こういう変哲もなとか全部銷びちやつてる、インターほんはもちろん壊れてて、玄関のドアも昭和アパートよりいい味出してる。

男1 お前今どこに住んでんだ。
女1 先輩の知らない町。
男1 なんだそれ。
女1 私こういうボロアパート見ると住んでみたくなるのよね。
男1 ジやあ住んでみろよ、こんな暮らしでさえ、今の給料じや苦しいんだ。
女1 お金の心配はいらないわ。

男1 何を言う。お前だつて何かのバイトで食い繋いでるだけだろ。

女1 お金と夢とどつちが大事?

男1 単純な話じやない。

女1 夢でしょ、夢に決まつてるじやない。

女1、男1の身体の臭いを嗅ぐ。

女1 なんだ。
男1 貧乏の臭いがする。

男1 何?

女1 汗臭い。

男1 悪かつたな。

女1 それでこそ先輩です。いい香りのシャンプーとか洗剤とか買えないのよね。

男1 石鹼なのよね、なんでも。ましてや香水

なんてもつてのほか。

男1 馬鹿にするな。

女1 襟めてるのよ、見直してるのよ、やっぱ

り先輩は夢の匂いがする。

男1 なんだそれ。

女1 臭つてみて。

男1 いいよ。

女1 さあ。

男1 なんだよ。

女1 いいよ。

女1 は男1に近付き自分の髪の毛を触

り。男1臭う。

女1 どんな香り?

男1 少し汗臭い。

女1 そうそれが夢の香りなの。リンスだ

って使わない。私剛毛だから、パサパサ。

硬い毛。これが夢の手触りというもの。
先輩もつと、昔みたいに胸張つて。
演やつて、ギャラなんて当然0の役者が

男1 年に1、2回、名もない小劇団の客

男1 うまい、うまい。

男1 ポテトを受け取り、二人食べる。

男1、女1から封筒を受け取り、中身を見る。

どの胸張れって言うんだよ。司令補には頭下げて、仕事続けさせてもらうよ。

男1 今まで1年以上同じ仕事続いたことなかつたけどさ、警備員の仕事はさ、

行けそうなんだよ、続けられそうなんだ。

女1 先輩。なぜそんなこと言うの。先輩は、吉三郎なの。

男1 何年前の話してるんだ。

女1 先輩が舞台に立つたら、一瞬でその場の空気は変わる。声を発せば、締め付けられる。先輩絶対チエーホフやつて欲しい。かもめ。かもめのトレープレフ、

絶対合う。私確信してるのよ。男1 チエーホフなんて夢のまた夢だよ。女1 そんな弱音吐けるのも今のうちよ。お腹空いてない? ポテト。

男1 は食べている。

女1 好きな人と語らって、笑い合って、アツという間に時間が過ぎて、気が付いたら一日中いて、もう夕暮れで、テーブルの上のポテトのMは、こんな風に冷めている。

男1 そりやそうだ。

女1 それで、熱いうちに食べたら良かつたな、なんて言つて笑つて二人で食べる、冷めたポテトの味は、恋の味。男1 CMみたいだな。なんかの。

女1 すぐ機嫌直して、赤ちゃんみたい。男1 冷めて食いやすい。

女1 冷めたポテトつて、なんだかたまらない気持ちになるわ。

男1 なんだそれ。

女1 貧乏な学生カツプルはね。

男1 何の話だよ。

女1 お金がないからポテトSを一つずつ注文するよりね、ポテトのMを一つだけ頼んで分け合い食べる訳。

男1 お金がないからポテトSを一つずつ注文するよりね、ポテトのMを一つだけ頼んで分け合い食べる訳。

男3 ついさつきよ。稽古の延長戦と思つてさ、調べてみたら俺の駅の3つ先にさ、

あんな駅あつたつけ、各駅停車しか停まらない駅だよね、あれ。そこがさ君のアパートの最寄り駅だったから、行けるなと思って、来てみたら玄関、鍵開いてたよ。開けてみたらさ、ぶつぶつやつてるからさ。

男1 また鍵忘れてましたか。

男3 寺山はねチエーホフと同じ題名の「かもめ」という絵本を書いていてね、今回は非、その「かもめ」を舞台化しようと思ったんだ。悪かったね、チエーホフじやなくて、トレープレフじやなくて。

男1 いや、そんなつもりじゃ。
男3 でも、この「かもめ」の主役の少年だつて、いい役だろ。
男1 そりやもう、ただ。
男3 ただ何。

男1 あ、いや。

男3 何。奥歯にものの挟まつたような言い方して。

男1 寺山修司って名前だけ聞いたことあるだけで、小難しいのかなつて。僕、演劇論とか演技論とかからつきしダメで。

男3 そんなのいいのよ、俺だつてわからん

ないのよ、ようはここ（胸）でしょ、ここ（胸）。

男1 はい、全身全靈でります。

男3 それにしてはさ、さつきの冒頭のブロローグ。伝わらない、ここ（胸）にさ、グ、ゲググ、ってこない。ただ喋つてる。

男1 はい。

男3 少年は船出の時、少女と交わした1年後の誕生日に必ず戻る約束を守ることができなかつた。自分だけ渡航先の小さな島で燈台守の娘と結婚して、子の親となり、孫を得たの。そういう負い目をさ、50年経つた老境の自分で語つてゐる訳。

男1 はい。

男3 心配だな。あなたは38歳にしては、若くも見えるし、その年齢からすれば、少年の50年後、老人の役も一人二役できると思って抜擢したんです。

男1 それはもう、はい、光栄です。たゞ自分より年齢が上の役柄をあまりもらはればいいのか。

男1 はい。

男3 聞くの、聞いちやうの。

男1 あ、はあ。

男3 どう思うの。

男1 え。

男3 あんたはどうしたいの。

男1、首をかしげる。

男3 アホなの？

男1 すみません。

男3 部屋に入り、ちやぶ台越しに男1の前に座る。

男3 役の気持ち想像してさ、少年の心めがけて、台詞吐けよ。心めがけてさ。

男1 ・・

男3 基本でしょ。中村吉右衛門。

男1 ドラえもん？

男3 ばか野郎！

男1 はい。

男3 初代中村吉右衛門ね。歌舞伎のね。役者が本当に泣かずして、どうして観客

男1 を泣かせることができましよう。つて言つてるよ。

男1 はあ。

男3 メモしろよ。メモ。言つてんだろ、いつも、演出家の言つたことは書く。

男1 は台本に書く。男3はちやぶ台の上に置かれたりんごをかじる。

つしょにお祝いできるからね。」

男3 だめー。

男1 はい。

男3 ト書き何て書いてる?

男3 もらうよ。
男1 あ、それは。
男3 冷えてないね。
男1 それは・・・陸奥です。それは陸奥
です。

は今香水にはうるさいんだ。かもめの少
女に香水をつけて舞台に立つてもらお
うと考えていてね、日夜、グ、グググと
胸にくる香水を探しているからね、この
香りが、香水かそうでないか、くらいの
ことはわかるんだよ。

男3 何ぶつぶつ言つてんの。

男1 ぶつぶつじやない、陸奥だ。青森の。
高級りんごの陸奥だ。唯一奮発して買う、
一週間に一度の楽しみなのに。

男3 りんごの一つや二つ、俺がいつでも
買つてやるさ。
男1 陸奥だ、それは陸奥だぞ。他のりん
ごとぜんぜん違うんだ。高いぞ。

男1 の言葉を遮り。

男3 どうだか、女と遊ぶ暇があつたら台
詞真剣に覚えて欲しいものだね。
男1 遊んだりしてません。僕は必死に少
年を全うしようと日夜。

男3 ジやあ、やつてもらおう。

男1 え。
男3 第2場、少年が船上から少女が見え
なくなるまで手を振っている。俺が少女
の台詞やるから、手を振りながら少年の
台詞。

男3 ちょっと待て。何か匂う。
男1 陸奥の香りだろ。
男3 そんなんじやない。
男1 も辺りの匂いを嗅ぐ。

男1 は手を振り。

男3 女の香りがする。
男1 女? 陸奥ですよ、陸奥。
男3 むつむつうるさいな。これはりんご
の香りの香水だ。女が付けるやつだ。俺

男1 「来年のきみの誕生日は、きっとい
う。もう一回。もう台詞からいつ
て、お茶を沸かして、本を読んで、沖を
眺めて。」どうぞ。

男1 「どこにも嫁になんか行くなよ。」
男1 あ、はい。
男3 「じゃああたし待つて、絵を描い
て、お茶を沸かして、本を読んで、沖を
眺めて。」どうぞ。

男1 「来年のきみの誕生日は。」
男3 違う。もう一回。もう台詞からいつ
て。違います。
男1 はい。
男3 よーい、はい。
男1 「どこにも嫁になんか行くなよ。」

男1 は手を振り。
男3 違う、もう一回。

男1 え。

男3 よーい、はい。

男1 「どこにも嫁になんか。」

男3 せんせんダメ。ねえ、俺どこの誰だ
がわかつてる？
男1 はい。

男3 言つてみろ。

男1 令和天井桟敷の寺山さんです。
男3 違う！令和天井桟敷(てんどんさじ
き)の寺岡だ。

男1 え。天井桟敷。

男3 何が悪い。

男1 いや、別に。

男3 あのさ、見えない。せんせんかもめ
の世界観が見えないよ。君役者向いてな
いよ。辞めちまえ！

男1 の携帯電話が鳴る。

男1 すみません。

男3 ほんと、辞めちまえ。

男1 電話に出る。

男1 もしもし、もしもし、もしもし、も
しもし、もしもし、どなたですか？何な
んです。

電話切れる。

男1 すみません、変なイタズラ電話で。

男3 何かを見つける。床から何かをつま
み上げる。

男1 何です。

男3 君の髪の毛じやないね。こんな長い、
こんな細い、柔らかい、茶色の髪の毛は、
君の髪の毛じやないね。

男1 知りません。

男3 女だな。
男1 女は連れ込んでません。

男3 ジやあ、何なんだ。りんごの香水と
いい、この一本といい。別に構わない。
君がどんな女と現を抜かそうとも。私の
知つたこつちやない。でもね。私は天井
桟敷の演出として責任がある。

男1 落ちてる髪の毛も掃除できていな
いような部屋だが、女連れ込んだとは、
ひどか。

男3 ん？
男1 おらだつて、がんばつちよる。あず
まい少年目指しとる。

男3 何？何言つてる。

男3、部屋の明かりを消す。

男1 あ、また出でしまった。ちょっと高
ぶると、その津軽の。

男3 そんなことじや、本番はもつと緊張
して、興奮する、そろそろ立ち稽古が始
まる、こんな大事な時に、女のことばか
り考えているようだから少年の気持ち
もわからないんだよ。少しほはさ、少年の
帰還を待ち疲れて発狂し崖の上から飛
び降りてかもめになつた少女の気持ち
に寄り添つてみたらどうなんだ。それに
なお前な、まだ台詞頭入つてないの？本
番まで1ヵ月。正直に言つてさ、君の語
尾さ、「て」とか「で」がさ、「てえ」「で
え」つて変な癖あつてさ、気持ち悪いん
だよ。ね。わかる？自覚して。一週間で
台詞全部覚えて。一週間で入つてなかつ
たら、降板ね。降板。わかつた？いい奴
がさ、若いイキのいい奴がさ、先月入団
したのよ。何年ぶりかの新劇団員よ。彼
少年役に合うと思うんだよな。

男1 ・・
男3 何かと言えよ。

男1 あの、少し荒っぽい口調にやさしさ
を込めて、というのは、その。
男3 そんなもん知るか。

男1 え、何ですか。

男3 暗くなるということは、耳を澄ます

ということだ。集中してかもめの少年の
気持ち巡らせる。気持ちができないか
ら、船の上から手一つ振れないだ。一週
間だからな。

男1は、女1に台本を見せる。

女1 しつかりしてよ、先輩。ほら、背筋
伸ばして。

男1 天井じやなくて天井なんだ。彼は寺
山じやない、寺岡だ。天井なんだ。

女1 天井じやなくて天井??

男1 ゼンゼン違ったんだよ。

女1 ・・・ごめんなさい。

男1 君が悪いんじやない、俺が役の気持
ちに入り切れてない、それが悪いんだ。

女1 先輩が悪いんじやないの、あの演出
家がダメなの。気持ち、気持ちって。道
理で天井じやなくて天井だわ。寺山のこ
とぜんぜんわかつてないじやない。寺山

男1 昔は、南高演劇部のスターだつたん
だ。あんな若造に演劇の何がわかるって
言うんだ。

男1 俯き。ポケットから、たばことライ
ターを出す。やり切れない感じでたばこ
をくわえ、ライターの火を灯す。と、部
屋に女1がいる。

男1 いえ。（女1に圧倒される感じで）

男1 試みる。

女1 先輩、大丈夫?

男1 また、君か。

女1 元気ないじやない。

男1 うん。かもめじやなかつたんだ。

女1 え。

男1 チエーホフのかもめじやなくて、寺
山修司のかもめだつたんだ。寺
山のかもめ?

女1 雑誌に詩を投稿していた高校生た
ちを集めて彼らに自作の詩を舞台で朗
読させたのよ、少なくとも3分ぐらいだ
つたら世界中の人がみんな名優になれ
るつて考え方から生まれたの。寺山は氣
持ちがどうだこうだ、言つたりしてない
のよ。

女1 ぜんぜんわかんないわよ。

男1 あ、うん。

女1 嬉しいって思つてみて。

男1 試みる。

男1 早く。

男1 ああ。

男1 勉強しろ勉強しろつて、高校時代、
何度も夏休みのマクドナルドで私を叱
りつけたの先輩じやない。

男1 そうだけど。
女1 先輩が悲しい気持ちだか、嬉しい気
持ちだか、怒つてると泣きたいのか、
そんなことは先輩見たつてわかんない
のよ。わかる？

男1 え。

女1 悲しんで。

男1 は。

女1 今、ここで、悲しい気持ちになつて
みて。

男1 試みる。

女1 ちゃんと嬉しい、つて気持ちになつて。

男1 なれないよ。

男1、俯く。

女1 そう、それよ。

男1 そういうことなのよ。形にしないと、

女1 動きにしないと、だから今みたいに、首を下に向ける、つて具体的に動けば、ちゃんとわかるのよ。気持ち。今悲しい。そうでしょ。

男1 でもなんか歌舞伎の偉い人。

男1は女1から台本を奪い、そこに記されたメモを見て。

男1 何やら吉右衛門って人はさ、役者が本当に泣かずして、どうして観客を泣かせることが。
女1 6代目菊五郎は、肩を少し動かす背中を見せるだけでお客様を泣かせられないようじやダメだって言つたわ。

男1 ?
女1 ・・・役者に限つた話じやないんだからね。みんな、みんなそなんだから。

男1 どういう意味だ。

女1 気持ちなんてわからないんだから。ぜんぜんわかんないんだから。

男1 一週間で台詞全部頭に叩き込まないと降板だつて。

女1、男1から台本を奪う。

女1 これくらいの台詞先輩なら大丈夫。覚えられる。

男1 例え覚えられたとしても、少し荒っぽい口調にやさしさを込めて、なんてわからぬ。

女1 そんなト書き指示はそもそも曖昧なのよ。この役を誰がやるか、どんな年齢のどんな容姿の役者がやるかでイメージなんて変わつちやうんだから、こういうのはね、曖昧だから正確だつていうものもあるのよ。

男1 小難しい演技論は止めてくれ。やつぱり俺はさ、立てないのかな。一生立てないのかな。帝国劇場とか明治座とか。

女1 大丈夫、書類審査また2つ送つておいたからね。今度は大舞台よ。通つたら

オーディションよ。先輩はまだ自分の魅力に自分で気付いていない。それがいいところ。

男1 わたしはロマンスなんて信じない、現実はけつして甘いものではないのだ。老人はそうつぶやいた。それは真実だった。

女1 台詞？

男1 エンディングの台詞でさ、身につまされるんだ。この台詞言う度に。甘くなんだよな、人生。いつまで夢だ、夢だ言つて生きてんだって、言われてる気がしてさ。

女1 台本を見て。

女1 でも、その後に、「だが、老人はま

だ、心の奥深くあの夜の少女を愛していたのである」と続くじやない。現実は甘くない、それが真実だけど、心の奥深くでは、夢見ていたのよ。この老人も。はい、いつもの、いつもの。

男1 ・・・うん。あめんぼあかいなあいうえお。

男の声 こらー、うるせえんだよ。

男1 またか。

男1ため息。と男1の携帯の着信音が鳴る。男1は電話に出る。

男1 もしもし。いつも何なんだ。君は誰なんだ。おい、黙つてないで、何か言つたらどうなんだ。今どき無言電話なんて流行らないよ。おい、何とか言え。なんでいつも公衆電話からかけて来るんだ。おい、もしもし。もしもし。

コードを大切に持っていました。ここまで一息でいく方がいいな。そうだ。「海で死んでひとはみんなかもめになつてしまふのです。これはダミアの古いシャンソンの一節です。ダミアの好きだったぼくは、このレコードを大切に持っていました。」

悩ましい男1。朝刊に挟まつたチラシの東を見始める。

男1 … レタスはまるやす、白菜はやすひこ、豚肉はひこまる。

暗くなる。

タイマーなる。「ピピピピ」。男1タイマーを止めて。

男1 風呂風呂。

男1風呂場に向かおうとするが。暗くなる。

照明薄暗く灯る。部屋は暗いが、窓から差し込む月明りが、かるうじて、男1を灯す程度。男1は台詞を覚えようとしている。台詞をぶつぶつ言つては、口ごもり、台本を見て、また台詞、止まる、台本見る。台詞。まだ台詞を覚えられない。

男1 間違い電話じやなくてイタズラ電話なんだ。公衆電話からの。

氣が付けば女1はいなくなつている。

男1 あれ。明るくなると、男1何やら封筒を開けている。中から半分に折り畳まれた紙を出し。

男1 舞台「美少女戦士セーラームーン」書類審査結果。サークルの象使い・・・不合格。

男1 「ほこりまみれの書斎。若いころ船出した、船の模型などを置いてあるテーブル、帆布、片隅のポータブル蓄音機はかされた声で、古いシャンソンを歌つていた。海で死んだひとは、みんなかもめになつてしまうのです。」ぜんぜん覚えられない。ダメだ。

男の声 うるせいいかげんしてくれ。男1 発声練習してて訛じやないべ！

男1 はちやぶ台に突っ伏し、眠つてしま

男1 もう一つの封筒も開封する。
男1 ミュージカル「ムーンライトピクニッケ」。占い師の男・・・不合格。

男1 いや、待てよ。「海で死んでひとはみんなかもめになつてしまふのです。これはダミアの古いシャンソンの一節です。ダミアの好きだつたぼくは、このレ

う。飛び起きた。目をこすり、ライターで火を灯し、煙草を吸おうとする。しかし。ライターの火が付かない。何度もやつても。火が付かない。男1諦め、また台詞を。しかし。また眠りに落ちてしまう男1を深い眠りに沈めるように、微かな照明も落ちる。

照明灯ると、女2と男1がちやぶ台越しに向かい合って座っている。男1お茶を入れている。

女2 ニュースペーパーなんて今どき珍しい。
男1 まさか来てくれるなんて。
女2 だつて、前カフエテリアで、住所教えてくれたじやないですか。
男1 そうだけど。
女2 私ニュースペーパー読んでる人好きです。

男1 黙つてお茶を入れている。
女2 来ちゃまづかつたですか、
男1 いや、そんなことないさ。何か相談でもあるのか。まだ落ち込んでるのか。痴漢なんか気にするな。前純喫茶でも話したが、駅の警備なんてしてたら痴漢な

んで珍しいことじやないんだ、君が特別不幸な体験をしたと思わなくていい。君はむしろ魅力的だつたんだ、それくらい前向きに考えておく方が、下を向くよりはいいはずだ。

女2 好きです。

男1 そんなに新聞読む人がいいのか。
女2 あなたが、好きです。

男1 ・・

女2 照れてるんですか。

男1 え、いや。

女2 かわいい。

男1 君は前の純喫茶でも、からかうみたいに、私のこと好きだ、かわいいだ、言うけれど、私はもういいおじさんだ、君はまだアメリカのハーフで二十歳そこそここの学生で。

女2 大好きです。

男1 え、あ、え、いや。

女2 そういうところ。

男1 え、あ。君はアメリカのハーフで。

女2 見た目は、150%日本人。

男1 だから余計にぞくぞく。

女2 ドギマギしてる。

男1 君の良いところは、そのように、直

球で、野茂みたいなトルネードの150

キロのストレートで、気持ちを人に、つ

まり私に、伝えられるところだ。
女2 かわいい。

女2、男1の手を握る。

男1 が、が。

女2 野茂って誰？私のこと助けてくれた警備員の宏さんの手、自分の持ち場離れてでも、私の腕を引っ張って、ステーションのホームで痴漢から私を引き離してくれた、宏さんの手、プルプル震えてた。

男1 いや、それは。

女2 それが良かつたんです。この人は私を痴漢から助けるために、自分の限界を超えようとしてるって、思った。

男1 手先が震えているのは、姿勢が悪くて、肩の筋肉が血管を圧迫して手先が震えている、それだけだ。

女2 謙遜。

男1 こんな手で君は満足なのか。
女2 はい。

男1、女2を抱きしめる。

女2 宏さん。

男1、接吻しようと、唇を・・・

女2 やめて下さい。

男1 はい。

男1 離れる。

女2 そういうのは嫌いです。

男1 そうだな、そうだ。野茂ってさ、フ
オークが一級品でさ、メジヤーでも活躍
したんだ。元は近鉄のエースでね。

女2 近鉄?

男1 あ、もう近鉄なんかないもんな。あ、
そうだ、新聞やめようかな、つて。はい。

男1は女2にお茶を差し出す。

男1 今はさ、警備の仕事終わって、疲れ
て帰つたらバタンキュウ、新聞なんて読
む暇なくて、挟まつてるスーパーのチラ
シに目通すくらいな訳よ。

男1はお茶を啜りながら喋る。

男1 朝刊が玄関のポストに差し込まれ
るあの、なんだろ薄い新聞紙の束が配達
のおっちゃんの手の力で押し込まれた

時の鉄のドアと紙の擦れる音つて言う
のかな、独特で、あれで何だか一回いつ
も目が覚めちゃうのね、それで、あ、今

日も地球は回つて大袈裟だけ、ほ
んと何か変に安心してまた目覚ましが
鳴るまで眠るんだけど。でも、もうい
かなかつて。高いしさ新聞さ。黒石ね。そ
れ。青森の。茶畑の北限は新潟の村上な
んだ、でもそれは経済的な。

女2 うるさい。

男1え。

女2 ずーずーずーずー。お茶飲む時。カ
フェテリアでアメリカン飲む時も。

男1 ・・・猫舌なんだ。そう、診断され
たんだ。内科の立派な先生に。たこ焼き
とかシユウマイとか豚まんとか小籠包
とか食べられないんですつて言つたら、
それは猫舌だ、つて診断されたんだ、だ
からずーずー言わせないと飲めないん
だ。

女2 は髪をかき上げる。

男1 また。まだ。

女2 え。
男1 髮の毛。前の純喫茶の時も。
女2 あ、ごめんなさい。

ちやぶ台に落ちた髪の毛を拾う。

女2 猫つ毛なんです。

男1 一本一本細いのわかるから、絡まり
やすいし抜けやすいなら、髪をかき上げ
なければいいじゃないか。

女2 診断されたんです。

男1 ビューティサロンで、ファツショナ
ル

女2 猫背。
男1 あ。

女2 猫背になりますよ。

男1 ・・・俺は猫背なんだ。そう診断さ
れたんだ。前に接骨院の先生に、その先
生はね、学生柔道で何回も優勝した経験
のあるすごい先生でね、その先生がね、
僕を見た途端に、指一本僕に触ること
もせず、すぐに、君は猫背だね、って診
断してきたんだ。

ブルなビューティアーティストが、ミー

のヘアにワンタイム、ほんとにワンタ
イムだけタツチただけで、フツと、ユ
ーは猫つ毛ですね、つて診断されたんで
す。

男1 君ほんと単純な英単語しか発しな
いハーフだよね。

女2 はまた髪をかき上げる。

男1 だから。

女2 いい香りがしませんか。こうすると
上品な大人の女性の、香りがしませんか。

男1 え、ああ。

女2 一日で消えてしまう言葉が、一生の
支えになる、ということはあるんじやな
いですか。

男1 え。

女2 ニュースペーザーですよ。

男1 ああ。

女2 私、毎朝、未明に朝刊が届く食卓つ
て嫌いじやありません。何だか文学的で、
聰明で、博学で。

男1 君絶対日本語だけで喋った方がい
いよ。

女2 結婚して下さい。

男1 黙っている。

女2 宏さん、猫舌も猫背も病名だと勘違
いしちやうような頼りない宏さん、私が
側にいてあげたい。熱いお茶汚らしく飲
む宏さんの横で私は座つてあげてたい。
で、嗜めてあげて、ああとか言う宏さん
の手を握つてあげるの。自分を超えよう
と震える手を優しく包む。朝刊はこれか
らも頼みましょ、ね、そうしましょ。マ
ネーなら私だつて。ほら。

女2 そう言つて女2は、財布を鞄から出す。
しかしそれは小銭入れ。中身をちやぶ台
にぶちまける。10円玉ばかり。

男1 どう言われたら、それもそうだと思
う。ネーなら私だつて。ほら。

女2 情けないけど、でもこんな10円玉
だって100枚貯めた1000円、1
000円を1000個集めれば、100
万円、ニュースペーザーの一つや二つ、
へっちらよ。

男1 でもまだ二人は。

女2 付き合つてない。

男1 そうだ、

女2 警備員のあなたと私が出会つてしま
だ2カ月そこそこしか経つてないじや
ないか。

男1 そ�だ、そ�だ。それに今までに
二人が顔を合わせたのは、先月、偶然駅
で君が僕に声をかけてくれて、それで立
ち寄つた純喫茶で何気ない話を交わし
合つたそれだけじゃないか。

女2 そのランデブーで私確信したん
です。この人だつて。1年や2年付き合わ
ないと結婚の決心ができない男女の方
がまともじやないと思います。
男1 そう言われたら、それもそうだと思
う。えて来るけど。それに僕はまだ、仕事だ
つて警備員の契約社員で、だから誰かを
養えるだけの安定した収入なんかない
んだ。

女2 私、あのカフェテリアでバイト始め
たんです。宏さんとの思い出のカフェテ
リアで、働き始めたんです。

男1 あれはカフェテリアじやない、純喫
茶だ。それに、それにだ、私はその、肝

心の警備員の仕事だつて持ち場をよく
離れる、何かと誰かを助けたりして、君
のせいで、と言つてる訳じやない、毛頭
ない、でもそれで僕はもうすぐ首になる
んだ。

女2 だから私の収入があります。マネー
が心配で、ライフの一歩を踏み出さない
なんて嫌いです。見て下さい、この10

円玉たちだって、ほら見てあげて下さい
この子たち。

男1、その10円玉を手に取り、10円玉を見つめている。

男 1 お金を、あたかも自分の子どものよう
うに擬人化して呼ぶのは止めなさい。
女 2 ・・・
男 1 小銭入れに10円玉をこんなに蓄
えておく人は、大昔の人だよ、携帯電話
なんかまだ想像もできなかつた時代の
人たちがやることだよ。

フォンからの無言テレfonを思いついたんです。そしたらあなたの「もしもし」「どなたですか」だけでも聞けるん

女2 こんな10円玉だつて100枚貯められた10000円、10000円を100個集めれば、100万円にだつて化ける。

女 2 朝
男 1 利

女2 朝刊と共に目覚め、二度寝しちやう
あなたの唇にそつとキスをする。朝食は
味噌汁、トースト、沢庵、スクランブル
エッグ、納豆、スコーン。

あなたが警備のジョブに行つた後、

和は食器深い 深澤特 打附板を絶する
せて、カフエテリアの。

男1
女2
純喫茶のアルバイトに行く。

男 1 なぜこんなに10円玉ばかりなん

女2
え。

男 1 女 2 か。
5円も1円もない、10円玉ばかり
この子たち、かわいいじやないです

男1 お金を、あたかも自分の子どものよう
うに擬人化して呼ぶのは止めなさい。

男 1 フォンからの無言テレフォンを思いついたんです。そしたらあなたの「もしもし」「どなたですか」だけでも聞けるんじゃないかって。閃いたんです。

男 1 そんな君が、今日はやけに大胆じや

男 1 小銭入れに10円玉をこんなに蓄えておく人は、大昔の人だよ、携帯電話なんかまだ想像もできなかつた時代の人たちがやることだよ。

女2 頑張ったんです。頑張ったから、こんなことできたんです。ミーもチエンジしないといけない。ネーム外人のくせしてファイスはジヤパニーズじゃないか

男 1 だから馬鹿みたいだから変な英語
アハイスクールの
エアにワンピースー、シットしたジュニ
なくて、反論もできずクラスルームのチ
ベでいしゅりおでフレントだんかい

女2 ・・・はい。反論もできず教室の椅
いすみがさい

あつても声も出せない私、そんなんじや

タノたって 宏さんみたいはどうした
んです? (男1は女2が喋つて いる途中)

から、何か臭いを嗅いでいる。）警備の

けて出してあげられるような大胆なラ

イフを歩みたいって、何なんですか？（男）
1に

女2 え。

男1 りんごの香水。君はまさか。
女2 気付いてくれたんですね。

女2 は鞄から香水の瓶を出す。

男1 勝手に、僕の家に入り込んでいたのか。

女2 ごめんなさい。無言訪問、してました。

男1 そんなそれは、そんなことしたら、

それこそ不法侵入じやないか。

女2 そんな。私はマークイングしただけなんです。

男1 猫みたいな言い方やめる。まさか君。

女2 違います、この部屋におしつこした

男1 当然だ。

女2 このアメリカンアッフルノートの

香水を振った手の甲を、すりすり、この

すり切れた座布団にすりすり、こすり付けて。

男1 僕がりんご好きだから、香水も。

女1 りんごの香水は、ベイビーの夜泣きを軽減できるんです。

男1 赤ちゃん？
女1 宏さんってベイビーみたいなところ

ろあるから、私がりんごの香りを身にま

とえば、宏さん毎晩、安眠できるんじやないかと思つたんです。

男1 また僕は鍵をかけ忘れていたのか。

君の言う通り僕は仕方のない赤ちゃんだ。

女2 あなたが帰つてくるまでに、そそくさと出て行つて。

男1 間違いない、この香りが、数日前この座布団から。

男1 は女2に近付いて身体の臭いを嗅ぐ。と、そこへ。男2が登場する。

男2 おい、鍵開いてたぞ。

男1 須見司令補。

男2 お、取り込み中か。

男1 いや、そんなんじやありません。

女2 汚い所ですけど、どうぞ。

女2、男1の言葉遮り。

女2 お茶入れるのは私の仕事です、さ。

男2 いや、こうして夫婦の微笑ましいやり取りを見せられると羨ましい。

男1 須見司令補だって、奥様に二人のお子さんが。

男2 いや、子どもが二人もいるとね、もうね、こんなね。瑞々しい夫婦のやり取りなんてないのよ。お茶の準備をお互い気遣い合い、自らがやると自己主張するなんてね。

男1 いや、彼女はね、須見司令補が思つてているような関係の。

女2 津田エリザベスです。

男2 ハーフですか。

男1 名乗らなくていいんだよ。

女2 見た目は純和風ですけど。こんな若い、美人な奥さんがいたと

男1 須見司令補。

女2 今お茶入れますので。

男1 いやほんとお気遣いなく。

男1 俺がやるよ。

女2 あなたはジョブのお話が。

男1 君は今日来たばかり

男2 今日来たのはね。
男1 あ、はい。わかつております。わか
つております。

男2 いや、いいんだ。

女2、男2にお茶を差し出す。

女2 粗茶ですが。

男2 どうも。

男1 黒石茶だ。粗茶じゃない。

女2 私、納得できません。

男1 何だ疑うのか、これはまじうことな
き黒石の。

女2 なぜ宏さんが首を切られないとい
けないんですか。

男1 やめる。

女2 宏さんが、持ち場を離れたことは悪
かったかもしれません、でもその勇気あ
る行動で救われたのは、この私なんです。
改札を飛び越えてホームまで走り、私の
腕を握り、痴漢から私を引き離してくれ
た。

男2 あなただったのか。

男1 やめろと言つてるんだ。

女2 宏さんのような、勇敢な中年が、あ
なたがたの会社には必要じやないんで
すか。

男1 申し訳ない、須見司令補。お前は何
何

もわかつてないんだ、警備の何たるかも
知らずに。

男2 須見司令補、私は須見司令補が仰つ
た通り、警備には向いていません。

男2 今日、僕が、わざわざ家まで押し寄
せてきたのはね、首を伝えるなら、事務
所まで来てもらいますよ、でもこうして
一日でも早く伝えなくちゃならんと思
つたのはね。エリア長がね。君の仕事ぶ
りを高く評価して下さっている。

男1 エリア長が。

男2 1年間無遅刻無欠勤、そして、君の、
持ち場を離れてでも、困った人がいれば、
奥さんのように、困った人がいたなら、
ルールを無視してでも持ち場を離れて、
人助けに奔走するような君の誠実な姿
勢、生き方を是非、社員に教えたいと思
つてらっしゃる。エリア長は正社員とし
て君を推薦したいと仰つてている。

男1 え。

女2 正社員。

男2 それを伝えに来たんだ。

女2 あなた、良かつたわ。

男1 それは本当ですか。

男2 嘘なもんか。

男1 突然で、そんな。

男2 躊躇う必要があるか。
女2 そうよ、あなた。

男2 と、そこへ男3がやって来る。

男3 おい、鍵開いてたぞ。

男1 なんだ、次は誰だ。
男3 僕だ、俺。

男1 寺岡さん。

男3 取り込み中か。

男1 いや、まあ。

男2 人徳のある男の周りには、人が集ま
るんだ。どうぞ、私は伝えるべきことは
伝え終えました。さ、どうぞ。

男3 失礼。

女2 お友だち？（男1に）
男1 友だちだなんて。

女2 お茶入れます。

男1 おい。勝手にやるな。

男3 獲つたんだよ。賞、獲れたんだ。

男1 賞ですか。

男3 ああ、若手演出家コンクールの最優
秀だ。

男1 男3は賞状を男1に渡す。

男1 最優秀ですか。

論なんかちつとも知らない素人で。下北沢で歯食いしばって夢見て来たんです。

男2 左目をつぶつて下さい。

男3 なんだあんたは。

男1 須見司令補。私の職場の上司なんです。

男2 気になるんです。さ、左目を。

男3 何だよ。

男3は左目をつぶり、男2は指先で拭き取るような動作。

男2 涙の痕のような。

男3 そうさ、泣いたんだよ、不覚にも泣いてしまったんだよ、スピーチの壇上で。

男2 わかります、わかりますよ。私がなぜ警備員なんて一日中同じ場所に立つて、炎天下でも猛吹雪の日でも立ち続けるような仕事を、今生業として家族を養つていいかと言うとね、あ、すみません。

男3 いいですよ、聞かせて下さい。

男2 すみません、出しやばつて、そうだこれはお恥ずかしいものなんですが、今度社内報なるものに私の半生を記した記事を載せることになつたんです。これなんですが。よければ見てやつて下さい。

男2 は、女2と男3に、社内報を一枚ずつ手渡す。

女2 ヘえ、社内報なんて面白い。

男2 入社2年目にあたつた、築10年大規模修繕工事のマンション警備の仕事が転機だつたんです。その仕事は組まれた足場から住民を守るために、ただ立っているだけの警備でして、私は半年間エントランスに立ち続けたんです。そしたらね、少しずつ住人が私に挨拶してくれるようにになつたんですよ。

女2 ここわかります。「なんだかやはり嬉しかつたのは、幼稚園に登園する子どもがお母さんと手を繋ぎながら、行つてきます、と手を振つてくれたり、小学生がただいまつて微笑んでくれるようになつたことでした。」

男2 そうなんですよ、嬉しくて、涙がこぼれそうになつたんです。私。新潟の村上なんて田舎から上京して孤独にずっと誰とも喋らず立ち続ける警備を1年続けて、もう辞めようと思っていた、そんな時配備されたマンションの警備で、僕は初めて大都会の東京で人の優しさに触れたんです。だから泣いちやう気持ちわかるんです。

女2 私もわかります。孤独なハートが、誰かに救われた時のうれしさ。腕をつかまれて、こつちに来いつて。

男3 そうなんだよ、嬉しくてえんえん、泣いたんだよ。それで喋ろうと思ったら、なんだか気が動転して、昔の薩摩弁がどんどん出て来てしまって、笑われて、あいがときげもした、あ、これは、薩摩で

ありがとうつて意味なんだけど、あいがときげもした、賞金でスーツの一つでも買うがよ、とか言って、でもその時にね、その壇上でね、俺は見えたんだよ、あんたが「かもめ」公演の場内整理をきびきびとこなしている姿が。

男1 場内整理。

男3 僕はあんたが、遅れ客誘導もできぱきこなすイメージがはつきり見えたんだ。

男1 少年の台詞、夜も寝ずになんとか覚えました。

男3 君と以前、この部屋で即興の稽古をつけた時、君は少し興奮気味に、津軽弁を喋つたことがあった。

男1 はい。

男3 僕が薩摩弁で笑われている壇上で、君の津軽弁を思い出してね、そうするとたちまち君のイメージが完成したんだ。

君は役者じゃない。場内整理だ。僕はね
演出と役者だけで芝居ができるとは思
っていない。スタッフも立派な創作メン
バーの一員だ。高ぶつて津軽弁が混じっ
た必死の君で、お客様を誘導して欲しい
んだよ。

女2 いいじゃない、宏さん警備員なんだ
し、そんな役回りお手の物よ。

男2 彼はうちの会社でも、切れ者でね、
上司からの信頼、も厚いんですよ。

男3 さもありなんですよ。

男2 機智に富んだ、という表現がぴった
りな男でして。

男3 でしうね。

男2 楽しみだ。

女2 ええ、ほんとに。

男3 先程から思っていたんですが、奥様、
なかなか魅力的な方だな。

女2 あら嫌ですわ。

男3 艷があつて、舞台映えしますよ、奥
様は女優向きだ。

男2 私もそう思つてたんですよ。

女2 もう、お二人とも、口がお上手な方。
その気になつてしましますわ。

男3 いやいや私は断じて、冗談や、まし
てや嘘は言わない眞面目人間でしてね。

今回の舞台でね、一人まだ役者が決まつ
た必死の君で、お客様を誘導して欲しい
んだよ。

てないんですよ。酒場のバイト役で、台
詞は二つしかない。でもバーで打殺
したかもめを優しく抱きしめてやる重
要な役どころなんですよ。

男2 奥さんびつたりじやないか。

男3 まさに奥さんみたいに、美しい女性
を探していたんです。

女2 まあ、そんな、でも私たちようどカフ
エテリアの、あ、純喫茶のアルバイト始
めたところでして、酒場のバイト役なら、
お役に立てるかも知れませんわ。

男3 決まった。明日から稽古だ。

女2 ジやあ、やってみようかしら。

男3 いや、これは渡りに舟つてやつだな。

男1 ・・・おい。

男2 いや、素晴らしい一日だな。正社員
雇用も決まって。

女2 結婚も決まって。

男3 奥さんの出演も決まって。

男1 ・・・待てよ。

女2 しがないボロアーパートの一室です
けど、ここで新しい二人のライフが始ま
ると思うと、お世話になつたお二人にた
だただ感謝しかありません。ありがとうございました。
本当に、本当に。

男2 何?

男1 僕は働いている暇はないんです。も
う僕は警備の仕事は首になる腹積もり
でいたんです。僕にはもつともつと俳優
修業の時間が必要なんです。深夜のコン
ビニバイトでもして食いつなぐつもり
です。今までお世話になりました。エリ

男3 今日はスタートじゃないですが。
女2 ほんとに、私ったら。

男1 ふざけるんじやないよ。
男2 え?
男1 ・・・帰つてくれないか。
女2 宏さん。
男3 どうしたんだい。
男1 結婚はできない。
女2 さつき嬉しそうな口調で、「いいの
かな」って仰つたじやないですか。
男1 とにかく、僕は結婚はできない。帰
りたまえ。

男2 どうしたんだい、君。
男3 どうしたんだい、君。

男1 須見司令補、僕は正社員にはなれま
せん。

男2 何?

ア長にもよろしくお伝えになつて下さ
い。お帰り下さい。

男2 正気か、君は。エリア長は君の誠実
な姿勢を評価して下さつて。

男1 誠実がなんだって言うんです。誠を
貫くから嘘もつくし、人殺しだつてする
んだ、誠実な生き方が、いつだつて間違
いの始まりじやないんです。

女2 ちよつと疲れてるんだわ。そうだわ。
お休みになつた方が。

男1 よく考えた方がいい。

男2 そんな時間はないんです。

男3 君は一体、なぜそんな生き急ぐよう
な言い方をするんだ。

男1 寺岡さん、僕は場内整理なんてお断
りします。

男3 でも君、少年役の降板は決まつたん
だ、それは演出の私が判断したことだ。

男1 ジやあこの座組みから降ります。そ
れにこの人（女2）は単純でバカみたい
な和声英語だけが言葉に混じる癖があ
るから、役者なんてできないんだ。

女2 そんな言い方サッドだわ。

男1 そういうところだよ。僕は忙しいん
です。ハムレットやリア王やロミオや。
そういう立派な役を演じるための、準備
や勉強や自主稽古やらで。

男3 君は無理だ。

男1 「俺の名を呼んでるのは、俺の魂、
人の魂だ。夜の闇に聞く恋人の音色の、
なんと白銀の鈴にも似た美しさだろう。
心澄ますほどの耳に、それはまるで静か
な樂の音の調べだ。」

男3 何だ、それ。

男1 ロミオとジュリエットですよ。何だ
それ、とは何と不勉強な。高校演劇部の
時からずつといつか自分が演じる時の
ために、台詞はたくさん覚えたんですよ。
だから僕には暇な時間なんてなかつた、
いつもぼそぼそ言つてるんですよ、登
校する時、休み時間、帰り道、口元がぼ
そぼそ動いていて、いつしかあいつは怖
い奴だつて噂になつて、友だちなんてで
きつこない、でもいいんです、よかつた
んですけど、今に見えて、いつか見てろ、
つて口元ぼそぼそやつてたんだ。

男3 君が一生演じることがない役だよ。
男1 「ゴドーだ、とうとうやつてきた。
ゴゴゴドーだよ。わたしたちは助かつた。
さあ迎えに行こう。さあ、ゴゴ、来いよ。
また帰ってきたな。」

女2 宏さん。

男1 ベケットのゴドーだつて、どんと來
いだ。

男3 そんな台詞覚えてどうなるつて言
うんだ。

男1 おら、覚えたんだ。

男3 また津軽弁だ。

男1 おらを誰だと思つてるんだべ？ 高
校時代、これでも少しは名優だ、名演だ、
つてちやほやされたべ。

男2 それはもう昔の話なんだよ。

男1 うるさい。「ああ、思いきや。すべ
ては紛うかたなく、果たされた。おお光

らず、妄想と幻影の混沌のなかをぶらつ
いて、一体それが誰に、なんのために必
要なのかわからずいる。僕は信念が持
てず、何が自分の使命かということも知
らずにいるのだ。」

男2 何を言つている。

男1 チェーホフのかもめ、トレープレフ
ですよ。正に今の僕にぴつたりの台詞じ
やないです。

男3 君が一生演じることがない役だよ。

男1 「ゴドードーだよ。わたしたちは助かつた。
さあ迎えに行こう。さあ、ゴゴ、来いよ。
また帰ってきたな。」

よ。おんみを目にするのも、もはやこれまで、生まれるべからざる人から生まれ、

まじわるべからざる人とまじわり、殺すべからざる人を殺したと知れた、ひとりの男が

男2 やめて宏さん。

男1 オイディイプス王だつて。

男3 無駄だ。

男1 覚えたんですよ、高校時代、誰か聞いて下さいよ、リア王だつてできるんですよ。

3人は男1の迫力に圧倒されている。

男1 「皆疫病に取りつかれてしまうがいい。どいつもこいつも人殺しだ。謀反人だ。俺は娘を助ける事が出来たかもしれない、今となつてはもう二度と戻つては来ぬ。コーディーリア、コーディーリア、まだ行つてはならぬ。今暫く。はつお前なんか言つたな?これの声はいつも優しく柔らかく物静かで、如何にも女らしい佳い声であつたが、お前の首を締めた奴はこの俺が打殺してしまつたぞ。」

とそこへ壁をどんどん叩く音。

男の声 逃げろ!逃げろ!

「どんどんどんどん」壁を叩く音。

男2 え。

男3 なんだ。

女2 誰?

男4 おい、何してんだ、火事だ、火事。

男2 火事。

男1 は、ずっと台詞を吐いている。男4 が息せき切つて入つて来る。

消防車のサイレン音が鳴り響く。

男4 早く。

男2、男3、女2去る。

男3 君、君、君。(男1はその投げかけを無視したまま)

男4 お前、死んじまうぞ。

男1、黙る。

男4 おい、1階でボヤだ。ここは2階なんだから、燃え広がつたら死んじまうぞ。

と、そこへ、女1が入つて来る。

男3 形振り構わず夢追うためにはね、能力が必要だよ。君演技うまいの?それだけのことだよ。

男2 お金がない人生はみすぼらしいものだよ、帰る家があつて、うまい飯ができる、温かい布団で明日を迎えることができる、そんな素朴な毎日はありがたい

ことだよ。いいかい、夢を追うことだけが、人生じゃない、そんなことはもうい歳した大人はみんなわかつてゐるんだよ。

女2 ラブがドリームをダメにするんじやない、ドリームがラブを息苦しいものにしてしまうんだわ。私そう思うわ。

男1 正社員も断つた。

女1 すごい、すごいわ、先輩。

男4 お前ら聞いてるのか、こら、お前だろ、お前が部屋に来て、一緒にあめんぼあかいな、なんだこうだ、叫び続けて、うるさくてうるさくて、何度も怒鳴りつけてやったことか。

男1 かもめの出演も断つた。だつてそりだろ、俺は、俺はさ、ロミオとかハムレットとか。

女1 そうね、そうね。

男1 でも俺はもう膨大な台詞が覚えられない。もう俺はどうすればいいのか、どう生きていけばいいのかわからなくなつたんだ。

女1 大丈夫。大丈夫よ。

男4 いい加減にしてくれ、つて壁をこの壁を、どんどんどんどん、叩いて。怒鳴つてたんだよ。

女1 先輩は長く頑張り過ぎたの、休みましょ。休まなければいけないわ。

女1はハンカチで男1の口元拭いてやる。

男4 高校時代、俺は一度だけ演劇というのを見た、その二人の熱演に感動して、

サイレン音、より大きく。女1、男1に寄り掛かる。

俺はアンケートなるものまで書いた。今は毎晩一升瓶だけが友だちみたいな男だけど、お前らのうるさい声聞くと思い出さんだ、あの二人の熱演を。だからお前らみたいな奴ら、怒鳴りつけてやりたくなるんだ。ガンバレよ、負けんなよ、ガンバレ、夢なら、食いしばって頑張れよつて。

女1 私がついてるわ。

男1 うん。

男4 俺は先逃げるぞ。

男4 去る。

君が火を放ったのか。

女1 そんな勇気私ない。

男1 君ならやりかねない。

女1 どうかしら。

男1 怖い女だ。逃げよう。

女1 もう少し。

男1 え。

女1 もう少し、ここで、一緒にいてもい

い？

男1 ああ。

男1 発声練習しようか。
女1 もういいのよ。

男1 昨晚、また同じ夢を見た。超満員の大劇場でカーテンコールに応える。

女1 超満員の大劇場で、先輩は何を演じていたんです。

男1 それがうまく思い出せないんだよ。

女1 もう、思い出さなくていいの。

男1 そうか。

女1 夢はみる必要があつて人間におこる現象だとすれば、眠りからさめた瞬間に、夢を忘れてしまうのもまた、忘れる必要があるからに違いない。

と、男1は女1を抱きしめる。この部屋に炎が迫っている、そして一瞬にして暗くなる。舞台は20年前に戻る。ちゃぶ台はテーブルに戻り、そこにファーストフード店のポテトMが置かれている。セミの鳴き声が響く。男1は顔に開かれた台本を乗せて居眠り中。女1はポテトを食べている。

女1、男1の脇腹をつつく。

男1 ぐへ。

男1起きる。顔に乗せていた台本が床に落ちてしまう。女1は落ちた台本を拾おうとする。

女1 眠つてましたよ。

男1 うむ。今どこだ、ここは。

女1 いつものマクドナルドですよ。

女1はぐちやぐちやに丸められたアンケートの存在に気が付く。

男1 超満員の大劇場でカーテンコールに応える夢を見た。

女1、ぐちやぐちやのアンケートを開く。

男1 気持ち良かつたなあ。

女1 先輩、これ裏にも書きが書いてありますよ。

男1 ん? そのアンケート誰が書いてくれたの?

女1 知らない、名前がないんです。

男1 で、裏は何て?

二人、冷めたポテトのMを食べながら、

女1 夢の壁を乗り越えようとする時、大切なことは、たった一人の相棒です。大

二人は数秒間見つめ合う。

女1 超満員の大劇場で、先輩は何を演じていたんです。

男1 ハムレットだ。第三幕第一場クロードイアスとポローニアスはカーテンの影に隠れ、オフィーリアは膝まづき、沈鬱な表情でハムレット登場。

女1 いよ、待つてました。

男1 「生きるか、死ぬか、それが問題なのだ。暴虐な運命の矢玉を心にじっと堪えるのと、海と寄せくるもろもろの困難に剣をとつて立ち向い、抵抗してこれを終息させるのと、どちらが立派な態度か。」

女1 うん、いいと思います。

男1 いいか、夢は絶対あきらめないんだぞ。わかつたか。

女1 はい、先輩。

男1 寝て起きて忘れるようじやダメなんだぞ。

女1 ですね、先輩。

(引用及び参考資料)

「かもめ」 寺山修司

「ロミオとジュリエット」「リア王」「ハムレット」 シエイクスピア

「かもめ」 チェーホフ

「ゴドーを待ちながら」 ベケツト

「オイディップス王」 ソポクレス

睦まじく、前を向いて語らっている。終わり。